

資料紹介： 沖縄の伝統鳥籠について

久 場 政 彦[※]

Notes on the Traditional Folk Birdcages of Okinawa

Masahiko KUBA^{*}

はじめに

沖縄では往時から鳥の飼育が趣味・娯楽の一分野として親しまれてきた^(注1)。とりわけ、さえずりが美しいメジロは人気が高く、専用の鳥籠で飼育・鑑賞する愛好家が多い。

日本の伝統的な鳥籠^(注2)の標準型は尺籠（さしかご）と称し、鳥の種類によって大きさや形状が変わる（八寸籠・尺二寸籠など）。さらに、捕獲用の仕掛けを施した「落とし籠」や運搬用の「追い込み籠」など、用途に応じた種類がある。

沖縄の伝統的な鳥籠（方音クー）には、日本本土の尺籠と同型の「シマゲー」の他に、支柱を曲げて加工した独特の「タミゲー」がある。また、用途別には捕獲用の「ウトウシゲー」と運搬用の「オイコミグラー」があり、日本本土の落とし籠・追い込み籠と同型である。鳥の種類別には、「ソーミナーゲー」（メジロ籠）と「ウグイシゲー」（ウグイス籠）が代表格である。後者の方が一回り大きく、型は「タミゲー」（曲籠）が多い。

沖縄では鳥籠の製作を生業とする職人はおらず、もっぱら愛好家の中で手先が器用な人物が注文を受けて製作する。評判になるとその人物の作品は愛好家の間で高値で取引されるようになる。メジロ愛好家の人口が多い本県では、名工の作品は相場が高く、100万円以上の高値が付く優品も存在すると聞く。

2006年（平成18）4月20日に沖縄の伝統鳥籠を寄贈された宮城宏友氏は、伝統鳥籠の収集家であると同時に、鳥籠製作の第一人者であった友寄英春（故人）に師事し、伝統的な鳥籠製作の技術を継承する

名工の一人である。先年、本館にて開催された沖縄コレクター友の会主催「沖縄歴史を綴る秘宝展」において、会員の一人として所蔵品の一部を出品・展示された際に、本件に関する寄贈の申し入れがご本人からあった。

今回、寄贈を受けた資料は、寄贈者が所蔵する名工作の鳥籠2点と自身製作の鳥籠4点、大和籠1点の計7点である。

その内訳は以下のとおりである。

- 1) タミゲー（曲籠／西平作）
- 2) タミゲー（曲籠／友寄英春作）
- 3) シマゲー（尺籠／宮城宏友作）
- 4) ヤマト式シマゲー（尺籠／宮城宏友作）
- 5) ウトウシゲー（落とし籠／宮城宏友作）
- 6) オイコミグラー（追い込み籠／宮城宏友作）
- 7) ヤマトゲー（大和籠／作者不明）

以下、これらの資料の詳細について報告する。

資料の概要

- (1) タミゲー（曲籠／西平作）

高さ41.0cm、横幅42.2cm、奥行27.7cm。

ウグイス用の鳥籠（ウグイシゲー）。名工・西平（ニシンダ）の作品で、「ニシンダゲー」の通称で知られる。製作の時期は明治末期ごろ。

西平は那覇区の久茂地（旧松下町、現松山1～2丁目）出身^(注3)。寄贈者の師・友寄英春に技術を伝授した人物である。

西平の技能の高さを伝える逸話が残されている。

※ 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館
Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

明治時代、首里のターリー（名士）が知人の紹介で西平に鳥籠の製作を依頼したところ、完成まで1年間待つように言われて当人は憤慨する。早々に、紹介した知人を寄びつけて文句を言ったところ、上手物の鳥籠は完成までに通常2～3年かかると諭され、逆にわずか1年で仕上げる西平の技量の高さに感嘆し、改めて製作を依頼したという^(註4)。



写真1 タミグー（西平作）①



写真2 タミグー（西平作）②

本資料は、寄贈者が70年代半ばに30万円で購入している。当時は1人あたりの県民所得が100万円に満たない時代である。現在の価値に換算すると100万円を上回る高値である。

沖縄では古い鳥籠のほとんどが戦禍で失われており、名工の作品が無傷で残ることは極めてまれである。本資料は、旧所有者（垣花出身の公務員）が沖縄戦のころ八重山に勤務していたため難を逃れた経緯がある。保存状態は良好であるが、とまり木と糞受けは別物である。

2) タミグー（曲籠/友寄英春作）

高さ27.7cm、横幅30.5cm、奥行15.5cm。

メジロ用の鳥籠（ソーミナーグー）。友寄（トゥムシ）の作品で、「トゥムシグー」の通称で知られる。



写真3 タミグー（友寄作）①

製作時期は戦後（詳しい時期は不明）。友寄は明治35年に那覇区久茂地（現松山町）で生まれた。生家（大典寺付近）の近所に住んでいた名工・西平から手ほどきを受けて鳥籠製作の技術を習得した。本業である電気工事業のかたわら鳥籠の製作に励み、愛好家の間で評判となった。

那覇市三原の自宅に工房を設け、依頼を受けて多くの作品を製作している。友寄の作品は、依頼者の希望価格に応じて作品の出来を変えたため、上手物から下手物まで様々なものが存在する。復帰前は3～5ドルから注文を受けたという。

60代後半から70歳を過ぎた頃までが製作者としての絶頂期で、当時はシマグーが25万円、ヤマト式シマグーが10万円の高値で売れた。小鳥屋（ペット・ショップ）の店主が買い求めることが多かったという。

73歳のトゥシビー（生年）祝いの直後から体調を崩し、鳥籠の製作が激減する。晩年は眼を患い作品を製作していない。享年78歳。

本資料は、メジロ用の鳥籠で、西平作のウグイス

籠（前掲）よりも一回り小さい。下部は側面に化粧板を施すなど精巧な造りで、全体に調和のとれた美しい曲線が目とを和ませる。保存状態は良好である。



写真4 タミグー（友寄作）②

3) シマグー（尺籠/宮城宏友作）



写真5 シマグー（宮城作）①

高さ22.4cm、横幅28.0cm、奥行14.1cm。

メジロ用の鳥籠（ソーミナーグー）。沖縄の鳥籠（シマグー）の特徴は、四隅にある支柱の上部が突き出ており、底部には脚が付いている点にある。支柱の突出部には籠を吊すための紐を通す穴が空けられている。日本本土の鳥籠は平置きもしくは「こおけ」と呼ばれる若鳥用の桐箱に入れて飼育するため、底が平らで吊り下げ用の穴もない。

各部の名称として、ウフブニ（太骨＝支柱・外枠）、ジョーグラー（門小＝扉）、スクグラー（底小・糞受けを含む）、ヒサグラー（脚小）などの呼び名が

ある。

製作者の宮城氏は、昭和11年に北谷村（現北谷町）で生まれた。青年期まで飼鳥に興味はなかったが、那覇市の職場（金融機関）に勤め始めたころ、メジロ愛好家の同僚に感化されてメジロ飼育と鳥籠の製作に興味を抱くようになった。その後、市民サークルの活動を通じて師の友寄氏と出会い、鳥籠製作の指導を仰ぐ事となった^(註5)。

指導を受け始めた当初は、“作品を多く製作すれば自ずと上達する”と簡単に教えてもらえなかったが、足しげく通ううちに認められ、工具の買い付けにも同行してくれるようになった。

本資料は、友寄氏の指導を仰ぎながら製作に励んでいた頃（70年代）の作品。



写真6 シマグー（宮城作）②



写真7 ヤマト式シマグー（宮城作）①

4) ヤマト式シマグー（尺籠/宮城作）

高さ23.7cm、横幅27.3cm、奥行13.3cm。

メジロ用の鳥籠（ソーミナーグー）。本資料は、上部が本土の尺籠、底部がシマグーの特徴を備えた折衷型で、師の友寄が創作した。本来のシマグーに比べて廉価品の扱いである。

用材は宮崎県産の孟宗竹を使用。与那原にあった材木店で買い求めた。購入した青竹は、肉に含まれるダキジル（油分）を抜くため毎日1～2時間ほど日向で干す。5～6年かけて乾燥させると良質の用材になる。正月の門松に用いた若竹は油分が多く含まれているためカビが発生し易く、用材としては適していない。

鳥籠を飾る金具や化粧玉は、着物の帯留め等の市販品を代用している。



写真8 ヤマト式シマグー（宮城作）②

5) ウトゥシグー（落し籠/宮城宏友作）



写真9 ウトゥシグー（宮城作）①

高さ26.2cm、横幅31.0cm、奥行14.5cm。

メジロ捕獲用の鳥籠。地域によって「パッタイグー」とも言う。二段組の構造で下に囿の雌鳥を入れて上部に雄鳥を誘い込み、中に入ると仕掛けの蓋が落ちて閉まる仕組みである。

雌鳥に誘われて寄ってくる雄鳥は精力が強く頑丈であるが、鳥モチで捕まるのは運動神経が鈍く脆弱なメジロであるとして敬遠された。

6) オイコミグー（追込み籠/宮城宏友作）

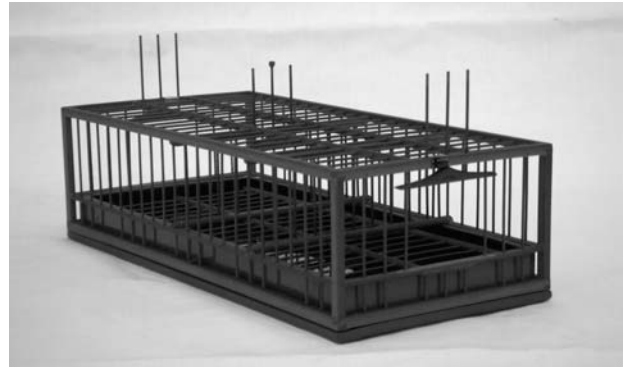


写真10 オイコミグー（宮城作）

高さ08.6cm、横幅29.7cm、奥行14.1cm。

捕獲したメジロを運搬するための携行用鳥籠。3室に仕切られており、最高3羽まで持ち運ぶことが出来る。7点の中で最も小型である。

7) ヤマトグー（大和籠/作者不明）



写真11 ヤマトグー（作者不明）

高さ20.8cm、横幅30.0cm、奥行16.0cm。

日本本土で「大和籠」と呼ばれる伝統的な鳥籠^(注6)。上物は「大名籠」と呼ばれる。昭和初期の作。沖縄の鳥籠に特徴的な支柱の突出部がなく、底

部に脚も付いていない。

大和籠は屋根の丸籬（ひご）に曲げの技法が施されているのが特徴。竹ひごを曲げる際は乾燥竹をいったん鍋で水炊きして柔らかくし、型枠にはめて長期間寝かせる。竹の質が悪いと型曲げの段階でササクレが目立ち使い物にならない。根気のいる作業である。大和籠の場合、熱した鉄コテで複雑な曲げを施す卓越した技術が用いられる。

本資料は保存状態が極めて良好。全体が黒光りして風格を感じさせる逸品である。

以上、今回の寄贈資料について概要を述べたが、首里・那覇の富家に伝わる趣味の分野に関する研究は皆無に等しく、参考となる資料は極端に少ない。今後の研究の進展が望まれる。

脚注

注1. 鳥飼の歴史は定かでないが、首里王府の史料「評定所文書」に以下の記述が見られる。

英人より小鳥一羽所望申出、さうみな買入相渡候段、御仮屋方江も大和横目屋嘉部里之子親雲上口上を以申上させ候事

「英人来着日記・道光貳拾七年正月廿九日」

※道光貳拾七年＝1847年

逗留唐人若狭町学校所江参通事国吉里之子親雲上相逢、さうめなあ壱羽買入置候間

右飼立候籠国吉二而細工人江調方相頼、代成等承申聞呉候様有之九貫文二而頼置候

段相逢候処、自分茂細工人家内江参恰好彼是相談を以相調させ為請取由

「仏人逗留二付那覇二而之日記・咸豊七年三月十五日」

※咸豊七年＝1857年

以上の記述から、19世紀中頃の琉球では“さうみな・さうめなあ”（いずれもメジロの方音）を飼う習俗と鳥籠の製作を請け負う“細工人”がいたことが判る。

メジロ飼育の習俗は、明治以降も富家の旦那衆を中心に鳴き声を愛でる優雅な趣味として伝えられてきた。戦前はメジロ飼育に熱中するあまり、家業を疎かにして没落させたという話も聞く。

また、子どもたちも遊びの中でメジロを飼育した

が、熱中し過ぎると学業が疎かになると親に叱られた。

注2. 日本の伝統的な鳥籠については、以下のような説明がある。

【鳥籠】

ウグイス・メジロなどの小鳥を飼う籠。材料はシノダケやマダケを用いた。竹伐り・皮むき・洗いや干しの順で材料を用意しておく。製作工程は、切り組み・建て前・籬（ひご）差し、底ぶちの順で行う。このなかで工作のとくに難しいのは籬作りと籬差しである。

日本民具学会編『日本民具事典』

注3. 那覇の久茂地は、近世末期より諸職がさかんで、絵師・表具師・木挽など細工師が多く居住していた。明治・大正期まで、これらの職人が副業として木製玩具（爬虫船模型など）の製造を手がけており、鳥籠の製作も請け負っていたことは想像に難くない。先述の「評定所文書」に登場する若狭町学校所も同じ地区（久茂地）に位置しており、国吉里之子親雲上を通じて製作を依頼された“細工人”が久茂地の職人であった可能性は高い。

寄贈資料(1)を製作した西平は役場の官吏であったとの口伝が残されており、久茂地の細工師との関連は見いだせない。しかし、当人は久茂地の出身であることから、近所にいた細工師から技術を教わった可能性は否定できない。

なお、戦前に商工業の中心地であった久茂地の旦那衆の間ではメジロ飼育が盛んであった。久茂地以外では、泊地区の住人がメジロ飼育を好んでいた。銘苅地区の林野はメジロを捕獲する格好の場所であった。子どもたちも自家製の落とし籠でメジロを捕獲して自宅で飼っていたが、飼育の知識が乏しかったので1・2年で死なせてしまうことが多かった。

注4. 首里の士族階級はウグイス飼育、那覇の平民層はメジロ飼育を好んだと伝えられているが、詳細は不明である。

注5. 寄贈者は20代の頃、盆栽を趣味とする那覇の

旦那衆（職工、問屋、床屋など）の愛好会に参加した。その会合には陶芸家の島常賀氏なども参加していた。趣味人の集まりにふさわしく、蘊蓄のある話を聞くことができた。会員たちは趣味人であることを誇りとし、「庭に池を掘ってクーユ（鯉）を泳がし、棚に盆栽を飾り、ソーミナーやウグイシを飼うのが本物の趣味人だ」と語っていたという。

この愛好会は明治生まれの年配者が中心であったが、次第に会員が増えて組織改革の動きが強まり、会則などを取り決めて「那覇盆栽会」に改組した。その後、同会は運営をめぐる対立から、古参会員が脱会して別組織を設立した。

注6. 丸屋根を持つ鳥籠や虫籠を古くから「大和籠」と称していた。特に、大名が持つ籠には紋が蒔絵で描かれ「大名籠」と呼ばれた。静岡の駿河竹細工が有名。細い丸ひごをさして組み立てる繊細な技術の特徴とする。

なお、戦前・戦後の鳥籠の販売状況について寄贈者は次のように述懐している。

戦前から戦後にかけて、沖縄の市場には県外製や海外からの輸入品が流通していた。特に、戦後の一時期、タイワンゲ（台湾産鳥籠）が市場に大量に出回っていた。沖縄のシマゲを真似て作られていたが粗悪品が多く、あまり売れなかった。

その頃、首里の寒川町に鳥籠の収集家として有名な寄留商人が住んでおり、師匠の友寄氏とふたりで収集品を拝見するために訪問したことがある。その帰り際にタイワンゲをお土産にもらったが、粗悪品なので嬉しくなかった。

参考文献

那覇市企画部市史編集室

『那覇市史 資料篇第2巻中の7那覇の民俗』
(昭和54年)

浦添市教育委員会

『琉球王国評定所文書』巻3 (1989)
同 上 巻14 (1998)

日本民具学会編

『日本民具事典』(平成9年、ぎょうせい)

角川日本地名大辞典編集委員会編

『角川日本地名大辞典47沖縄県』

(昭和61年、角川書店)

参考資料



写真12 タミグーの支柱（ウフブニ）を作るための型枠。三ヶ月ほど枠に固定した状態で据え置く。適していない竹ひごを用いると、ササクレだって折れてしまう。この作業がいちばん気をつかう。

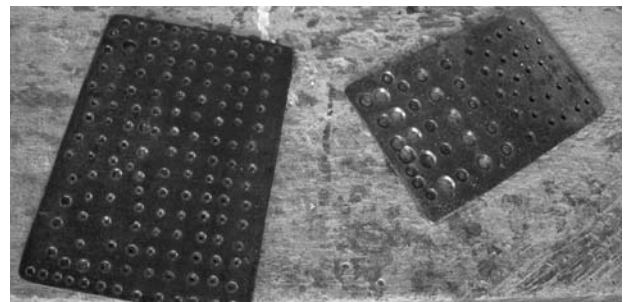


写真13 丸ひごを作る道具。手ごろな大きさの鉄板にクルマイリ（キリ）で大小の通し穴を空け、それにひごを通して太さを調節する。



写真14 メジロ籠の製作工具の一部。一つの工程で数種類の工具を使い分ける。

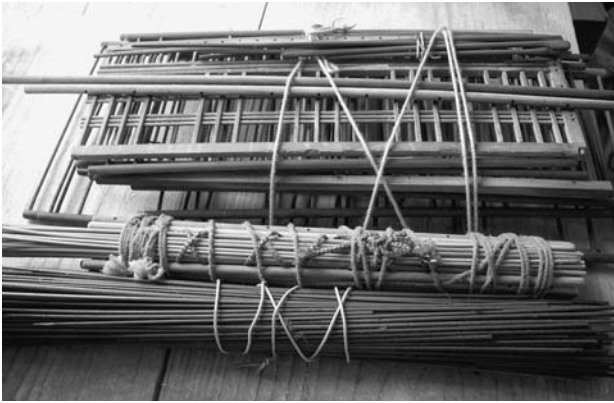


写真15 メジロ籠の部品。



写真16 メジロ飼育の許可証。鳥獣保護法の規定により、メジロの捕獲や飼育には、「鳥獣捕獲許可証」と「鳥獣飼育許可証」が必要となる。

